



# 京大広報

No. 632

2008.3



物質-細胞統合システム拠点(iCeMS=アイセムス)開所式  
左から尾池和夫総長, 林 幸秀文部科学省文部科学審議官, 小野元之日本学術振興会理事長,  
服部重彦株式会社島津製作所代表取締役社長, K.VijayRaghavanインド国立生命科学研究センター所長, 松本 紘理事・副学長  
—関連記事 本文2564ページ—

## 目次

監事活動からみた京都大学の業務  
監事 原 潔……2560

〈大学の動き〉  
平成20年度入学者選抜学力試験の第1段階  
選抜状況……2562  
部局長の交替等……2563  
上海交通大学との学术交流……2563  
名誉教授称号授与式……2563  
京都大学・大阪フォーラムを開催……2564

〈部局の動き〉  
物質-細胞統合システム拠点(iCeMS = アイセムス)  
が開所式・国際シンポジウムを開催……2564

〈栄誉〉  
山中伸弥物質-細胞統合システム拠点iPS細胞  
研究センター長/再生医科学研究所教授が  
ロベルト・コッホ賞を受賞……2565

〈日誌〉……2565

〈寸言〉  
古都京都に思いを馳せて 岡部敬一郎……2566

〈随想〉  
教養課程の思い出 名誉教授 荒木 徹……2567

〈洛書〉  
塞翁が馬 戸田剛文……2568

〈話題〉  
生存圏研究所がマレーシアで第83回生存圏セミナー  
を開催……2569  
第11回リカレント教育講座『心の教育』を考える  
—発達障害と家族への支援—を開催……2570  
マラヤ大学工学部長が工学研究科を訪問……2570  
きさらぎコンサートを開催……2570

〈訃報〉……2571

〈公開講座〉  
情報学研究科公開講座「知っていますか? ITの  
秘密」……2572

〈お知らせ〉  
人文研アカデミー アントニオ・ネグリ講演  
「知識労働とプレカリアート」……2572

〈隔地施設紹介〉  
フィールド科学教育研究センター北海道研究林  
……2573

## 監事活動からみた京都大学の業務

監事 原 潔

### 1. はじめに

3月末で京都大学の監事に就任して2期4年になります。この4年間で振り返ると初年度の監事監査規程の作成から始まって京都大学における業務の現状把握、試行的な監査報告、2年度、3年度に実施した重点項目を定めた監査、さらに本年は、「監査業務の起承転結」を念頭に置きながら、これまで述べた監事意見に対するフォローアップ状況監査を実施してきました。こうした4年間の監事監査活動の詳細な内容は、本学ホームページ\*でご覧頂きたいと思えます。本稿では、監事業務を通じて感じた大学における監事の役割と見てきた京都大学の業務改善への期待を私なりに述べてみたいと思えます。

※ 京都大学ホームページ [http://www.kyoto-u.ac.jp/uni\\_int/01\\_unei/kanji.htm](http://www.kyoto-u.ac.jp/uni_int/01_unei/kanji.htm)

### 2. 大学活動と監事の役割

#### (1) 大学活動の多様性と標準化

京都大学は、きわめて多様で広範な教育研究分野を持ち、関連する業務もまた多様であります。この多様性こそが大学が発展する潜在的なエネルギーになっていると思えます。その成果は、研究にしても人材育成にしても企業のように最終的に収支という経済的指標で評価することができない点に特徴があります。大学は、多くの知が集積されたところであり、それを大学というミニ社会で、実社会よりも先行して実現することによってその知の有効性や課題を検証し、新たな知の創造につなげることが重要であります。先に京都大学で実施を決めた環境賦課金制度の導入は、その好例です。

大学における研究内容の多様化や分散化は、独創性を発揮するためにも不可欠であります。一方で教育や大学業務には、そのサービスを受ける人達のために組織として一体的で標準的な活動が求められています。監事の役割は、大学の目指す目標・計画から見て、業務上の過度のズレを指摘して改善を促す点であります。例えて云えば、監事監査は、大学活動の健康診断をしているようなもので、大学活動を実査して大学組織体の健全性を検証すること、可



能な限りリスクが顕在化する前に改善意見を述べることでありと思えます。健康診断の結果に基づいて治療が必要な場合には、健康診断をした医師とは別な医師が治療を行うように、監事が指摘

した改善意見への対応は、大学の経営陣の判断に基づいて実施組織で対応することが求められます。

#### (2) 大学における監査活動とPDCAサイクル

大学の業務は、どの分野の業務であっても、計画(Plan)、実行(Do)、検証・評価(Check)、改善(Action)のいわゆるPDCAサイクルが循環することによって、目標に向けてプラスのスパイラルで向上していくことが期待されています。PDCAサイクルは、教育研究業務についても管理運営業務についても大学全体と共に計画、実行、検証、改善の機能ごとや経営者、管理者、実施担当者の組織レベルごとにもサブPDCAサイクルが機能する必要があります。こうした大学運営におけるPDCAサイクルが如何に効果的に機能しているかを検証することが監査業務の重要な役割であります。同時に、監査業務は、検証・評価段階の一部として位置付けられます。

大学における監査活動には、大学における教育・研究・社会貢献等に関わる運営・管理業務そのものを対象にした業務監査とそれを行うために費やした経費を対象にした会計監査とがあります。国立大学法人では、同じ監査対象であっても監事監査の他に、内部監査、会計監査人監査、会計検査院による会計検査という立場の異なる4種の監査が実施されています。勿論これらの監査は相互に連携して行われますが、その視点及び活用方法は異なっています。ただ共通する視点は、大学法人の自律性を担保・検証し、社会への説明責任を果たすためだと思えます。ここで監事監査は、法人に置かれる学長(総長)、理事による業務の執行状況を独立した立場から行う監査であり、内部監査は、経営上の判断から行う監

査であります。会計監査人による監査及び会計検査院による会計検査は、いずれも会計業務に特化した外部監査であります。これらの4種の監査が効果的に連携することによって法人の自律的な業務運営を検証し、担保することが期待されています。

### (3) 監事活動からみた京都大学におけるPDCAサイクル

平成19年度の監事監査では、過年度に述べた監事意見に対するフォローアップ状況を重要な監査項目としました。これはPDCAサイクルのCheckの結果に対するActionの状況を検証するものであります。これまで3年間に教育研究分野で23項目、業務運営分野で29項目の意見を述べましたが、それぞれについて対応状況を監査した結果、その実施状況は、約80%になりました。このことは、総長以下の経営陣、部局長等の管理者、担当責任者のそれぞれのレベルで、真摯な対応がされた結果であり、京都大学全体としてPDCAサイクルが機能していることを示しています。ただ、その実施の程度、進捗状況には、項目ごとにより違いがあり、引き続きPDCAサイクルを実施・検証していく必要があります。特に今後の京都大学の業務運営改善のためには次の諸点を課題として、その解決・改善へ向けた一層の努力を期待したいと思います。

## 3. 今後の業務改善への期待

### (1) 教育・研究・学生支援について全学的な基本方針と総合調整の必要性

京都大学における教育は、伝統的に部局自治を基本として実施されており、教育に対する各学部の実施責任を明確にして成果をあげてきたことは、評価できますし、今後も継承すべき仕組みだと思えます。しかしながら教育研究の環境整備や学生支援については、全学的な基本方針に基づいて個々の学生、教職員から見て格差のない教育研究環境や柔軟な支援制度を導入する必要があります。全学的な基本方針を最終的に決めるのは、役員会の責務ですが、各学部の教育研究環境や学生支援に係る現状把握などの共通する課題については、どこが調査し、企画・提案する役割を担うのかがこれまでやや不明確でありました。今後、平成19年に設置された教育推進部や研究支援をする研究推進部によって、機構、諸委

員会及び教育を担う各部局間での連携した企画・提案型の業務が期待されます。同様に社会連携・国際交流の分野についても、学外、海外の組織との連携を必要とする活動ですので、全学的な基本方針や戦略を明確にすることが求められていると思います。

### (2) 情報の共有と伝達—業務の透明性と説明責任

近年、事務の効率化、簡素化のために権限の移譲が進んでいますが、内部統制の観点から見ますと情報の共有と伝達の不足から各組織の業務が上下方向、水平方向、本部・部局間で業務内容や課題が見えにくくなっているように思えます。業務の透明性を確保し、説明責任を果たすためには、情報を上下、水平両方向へ伝達して課題を共有することが効果的であると思います。

大学における多様な業務は、総長の指揮のもとに担当業務ごとに担当理事→担当部→課(グループ)の本部事務機能と、業務全般について研究科長—事務(部)長—担当課・掛の系統で行われる部局事務機能とが併存しています。これらの組織がトップダウン、ボトムアップの両方向に機能するためには、管理者からの明確な指示と担当者からの迅速な報告・問題提起の両方が日常的に行われることによって知見と経験の活用、交流が進み、組織の活力が生み出されるのではないのでしょうか。そのためには現状把握、成功事例・失敗事例を情報として共有できる仕組みを全学的に拡げていくことが期待されます。

## 4. おわりに

海図のない海へ船出するような気持ちで監事の仕事を始めましたが、京都大学における業務フィールドを監事として航海するための海図と操船方法はなんとか身につけることができたかと思えます。フィールドには、自然、社会、業務など様々な対象がありますが、これらを分析し、体系化するのは、京都大学が得意としてきた分野だと思えます。大学業務の改善のためにこの伝統的な手法を生かして京都大学らしい業務フィールドを構築してほしいと願っています。京都大学の「自由の学風」は、すべての大学業務において創造的な改善、改革を積み上げていくことによって伝承されていくものと思います。

大学の動き

平成20年度入学者選抜学力試験の第1段階選抜状況

平成20年度入学者選抜学力試験の第1段階選抜が行われ、2月13日(水)、選抜結果が志願者に通知された。学部別の合格者は次表のとおりである。

学 部	募集人員	志願者数	倍 率	第1段階選抜		第1段階選抜の予告倍率		
				合格者数	倍 率			
総合人間学部	前期	120 <sup>^</sup>	432 <sup>^</sup>	3.6 <sup>※</sup>	432 <sup>^</sup>	3.6 <sup>※</sup>	—	
	文 理 系	前期	65	226	3.5	226	3.5	約 4.0 倍
		後期	55	206	3.7	206	3.7	約 4.0 倍
文学部	前期	220	651	3.0	651	3.0	約 3.5 倍	
教育学部	前期	60	207	3.5	207	3.5	—	
	文 理 系	前期	50	176	3.5	176	3.5	約 3.5 倍
		後期	10	31	3.1	31	3.1	約 3.5 倍
法学部	前期	320	791	2.5	791	2.5	約 3.5 倍	
経済学部	前期	230	803	3.5	760	3.3	—	
	一 般 文 論	前期	180	585	3.3	585	3.3	約 3.5 倍
		後期	50	218	4.4	175	3.5	約 3.5 倍
理学部	前期	311	865	2.8	845	2.7	(注)	
医学部	前期	223	624	2.8	603	2.7	—	
	後期	20	166	8.3	166	8.3	—	
	医 学 科	前期	100	321	3.2	300	3.0	約 3.0 倍
		後期	123	303	2.5	303	2.5	—
	保 健 学 科	前期	20	166	8.3	166	8.3	—
		後期	63	149	2.4	149	2.4	約 5.0 倍
	看護学専攻	前期	7	60	8.6	60	8.6	約 10.0 倍
		後期	30	85	2.8	85	2.8	約 5.0 倍
	検 査 技 術 専 攻	前期	7	51	7.3	51	7.3	約 10.0 倍
		後期	15	42	2.8	42	2.8	約 5.0 倍
	理 学 療 法 学 専 攻	前期	3	29	9.7	29	9.7	約 10.0 倍
		後期	15	27	1.8	27	1.8	約 5.0 倍
	作 業 療 法 学 専 攻	前期	3	26	8.7	26	8.7	約 10.0 倍
		後期	80	231	2.9	231	2.9	—
薬 学 部	前期	50	143	2.9	143	2.9	約 3.5 倍	
薬 科 学 科	前期	30	88	2.9	88	2.9	約 3.5 倍	
工 学 部	前期	955	2401	2.5	2401	2.5	約 3.0 倍	
地球工学科	前期	185	491	2.7	491	2.7	—	
	後期	80	224	2.8	224	2.8	—	
	前期	235	498	2.1	498	2.1	—	
	後期	130	299	2.3	299	2.3	—	
	前期	90	216	2.4	216	2.4	—	
	後期	235	673	2.9	673	2.9	—	
農 学 部	前期	300	796	2.7	796	2.7	約 3.5 倍	
合 計	前期	2839	7967	2.8	7883	2.8	—	
	後期	2819	7801	2.8	7717	2.7	—	
	後期	20	166	8.3	166	8.3	—	

(注) 理学部は、大学入試センター試験の5教科7科目の素点(英語は250点満点を200点満点に換算)が900点満点中630点以上の者を第1段階選抜合格者とする。

備考 下記外国学校出身者のための選考の最終合格者が募集人員に満たない場合には、その不足数を法学部10名、経済学部(一般)10名の募集人員に加える。

[外国学校出身者のための第1次選考実施状況 (外数)]

学部名	募集人員	志願者数(倍率)	第1次選考合格者(倍率)
法 学 部	10人以内	32人(3.2倍)	20人(2.0倍)
経 済 学 部	10人以内	21人(2.1倍)	15人(1.5倍)

(学生部)

## 部局長の交替等

### 情報学研究科長(再任)

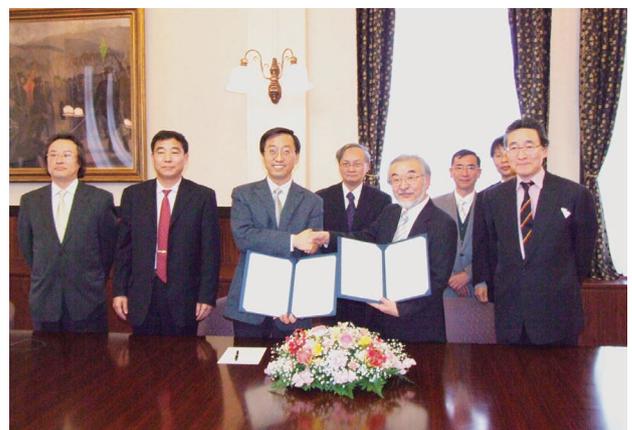
富田眞治情報学研究科教授(通信情報システム専攻コンピュータ工学講座担当(計算機アーキテクチャ, 並列処理))が, 3月1日付けで情報学研究科長に再任された。任期は平成21年2月28日まで。

## 上海交通大学との学術交流

本学と中国の上海交通大学は, 大学間学術交流協定の締結について協議を重ねてきたが, このたび本学と同大学の教育・研究の交流と協力を推進するための「学術交流に関する一般的覚書」を交換した。

「覚書」は, 尾池和夫総長と上海交通大学 張 杰(Zhang Jie)学長の署名により, 1月23日(水)に締結された。

上海交通大学は, 1896年に創設された高度な学術レベルをもつ総合大学で, 工学, 理学, 医学, 人文学, 法学, 外国語学等の20の学部を有し, 教員数は約3,000人, 学部学生, 大学院生は各約18,000人を数える。ホームページは <http://www.sjtu.edu.cn/>



協定締結後握手を交わす张学長と尾池総長および両大学関係者

## 名誉教授称号授与式

1月30日(水)午前10時から, 総長応接室において木谷雅人理事・副学長, 淡路敏之理学研究科副研究科長の出席のもとに名誉教授称号授与式が挙行政

れ, 尾池和夫総長から岡田清孝元教授(理学研究科), 稲垣省五元教授(理学研究科)に称号が授与された。



名誉教授の称号を授与される岡田元教授(左)



名誉教授の称号を授与される稲垣元教授(左)

(総務部)

## 京都大学・大阪フォーラムを開催

2月8日(金)、ホテル大阪ベイタワーにて「京都大学・大阪フォーラム」を開催した。本フォーラムは「産官学連携の新たなステージに向けて－卓越した知の創造と活用からイノベーションへの創出へ」をテーマとし、第1部、第2部の構成で民間企業を中心に各省庁、学術関係団体、経済団体などから約140人が参加した。尾池和夫総長による挨拶の後、第1部として木谷雅人理事・副学長の司会進行のもと、始めに松本 紘理事・副学長より、グローバルCOE等研究活動の紹介が行われ、次いで中辻憲夫物質－細胞統合システム拠点長が「物質－細胞統合システム拠点」、西本清一工学研究科長が「高次生体イメージング先端テクノハブ」、湊 長博医学研究科教授が「次世代免疫制御を目指す創薬・医学融合拠点」と題し、先端的・独創的研究活動の紹介を行った。第2部では、松重和美副学長の司会で、松本理事・産官学連携本部長、牧野圭祐産官学連携センター長より、本学における産官学連携の取り組

みについて説明があり、その後、5課題の新技术の発表が行われ、盛会の内に終了した。

また、フォーラム会場と同じフロアの展示ブースでは、ポスターの掲示や相談コーナーを設け、新技术および産官学連携活動の紹介を行った。



大阪フォーラム会場の様子

(総務部)

## 部局の動き

### 物質－細胞統合システム拠点(iCeMS＝アイセムス)が開所式・国際シンポジウムを開催

2月19日(火)、物質－細胞統合システム拠点(iCeMS＝アイセムス)の開所式が挙行政され、翌20日(水)から22日(金)まで第1回 iCeMS 国際シンポジウムが開催された。



iCeMSは「国際シンポジウムを年2回開催すること」を運営方針として謳っており、今回はその最初のシンポジウムとして、世界のトップレベルの研究者を招へいし開催された。

これらの式典・シンポジウムは、iCeMSの運営方針により全て英語で執り行われた。

iCeMS URL: [www.icems.kyoto-u.ac.jp](http://www.icems.kyoto-u.ac.jp)

開所式は3部構成で、第1部の記念講演会および第2部の開所記念式典は時計台記念館百周年記念ホールで行われた。国内外からの招待者・報道関係者・一般来場者で500席の会場はほぼ満員となり、質疑応答でも活発な議論が交わされた。続く第3部の記念レセプションは市内のホテルに会場を移して行われ、盛会のうちに終了した。

2日日以降の国際シンポジウムは、市内の別のホテルを会場として講演・議論・ポスターセッションを中心に進行。こちらも国内外から多くの参加があり、会場は終始熱気に包まれた。



中辻拠点長による記念講演

(物質－細胞統合システム拠点)

## 栄誉

### 山中伸弥物質－細胞統合システム拠点 iPS 細胞研究センター長/再生医科学研究所教授がロベルト・コッホ賞を受賞

このたび、山中伸弥物質－細胞統合システム拠点 iPS 細胞研究センター長/再生医科学研究所教授がロベルト・コッホ賞を受賞されることになりました。

授賞式は、11月にベルリンで行われる予定です。

以下に、同教授の略歴、業績等を紹介します。

山中伸弥教授は、昭和62年神戸大学医学部を卒業後、国立大阪病院臨床研修医を経て、平成5年大阪市立大学大学院医学研究科博士課程を修了し、米グラッドストーン研究所博士研究員、日本学術振興会特別研究員、大阪市立大学医学部助手、奈良先端科学技術大学院大学遺伝子教育研究センター助教授を歴任した後、同16年京都大学再生医科学研究所教授、同19年京都大学物質－細胞統合システム拠点教授に就任、同20年1月には同拠点内に設置された iPS 細胞研究センター長に就任し、現在に至っている。

今回のロベルト・コッホ賞受賞は「体細胞からの多能性幹細胞誘導」に関する業績に対するものである。平成18年8月、4つの因子(Oct3/4, Sox2, c-Myc, Klf4)を組み合わせてマウス体細胞に導入することにより、高い増殖能と様々な細胞へと分化できる多能性をもつ iPS 細胞の樹立に成功し、同



19年5月には改良したマウス第2世代 iPS 細胞を樹立し、同細胞を受精卵に戻すことにより、マウスの全身の細胞に正常に分化することを明らかにした。そして同年11月、ヒトの皮膚細胞から ES 細胞(胚性幹細胞)と遜色のない能力をもった人工多能性幹細胞(iPS 細胞)の開発に成功し、続いてがん遺伝子でもある c-Myc 以外の3因子により大人のマウスおよび成人皮膚細胞から iPS 細胞を樹立した。同20年2月、同教授、科学技術振興機構(JST)、医薬基盤研究所(NIBIO)の研究グループは、マウスの肝臓と胃の細胞から iPS 細胞を作製することにも成功し、iPS 細胞は分化細胞の時計を巻き戻すことによりできることを証明した。

これらの業績に対して、平成18年に科学技術政策研究所「ナイスステップな研究者」に選定され、同19年に大阪科学賞、独マイエンブルク賞、同20年に朝日賞、井上學術賞が授与された。これらに続いての今回のロベルト・コッホ賞受賞は、まことに喜ばしいことである。

(物質－細胞統合システム拠点)

## 日誌 2008.1.1 ~ 1.31

- |      |                        |     |  |
|------|------------------------|-----|--|
| 1月4日 | 新年名刺交換会                | 23日 | 博士学位授与式                                |
| 7日   | 総長挨拶                   | 〃   | 中国、張 杰 上海交通大学学長 他1名、総長他と懇談および学術交流協定調印式 |
| 〃    | 仕事始め                   | 24日 | 財務委員会                                  |
| 〃    | 役員会                    | 28日 | 役員会                                    |
| 11日  | 学生部委員会                 | 29日 | 教育研究評議会                                |
| 15日  | 役員会                    | 30日 | 名誉教授称号授与式                              |
| 〃    | 部局長会議                  | 〃   | 企画委員会                                  |
| 16日  | 企画委員会                  | 〃   | 総長選考会議                                 |
| 〃    | 国際交流委員会                | 〃   | 経営協議会                                  |
| 19日  | 平成20年度大学入試センター試験(～20日) | 31日 | 広報委員会                                  |
| 21日  | 役員会                    |     |  |

## 寸言

## 古都京都に思いを馳せて

岡部 敬一郎

「こんこんと歴史降ると  
京の雪」古都京都の冬の一齣  
を巧みに詠んだ尊敬する今は  
亡き先輩の一句である。九州  
で生まれ育ち九州から一步も  
出る気はなかったのだが高校



の恩師であり野球部の監督で  
もあった京大の先輩に勧められ期せずして京都で学  
生生活を過ごす事となった。当然野球部に入部した。

最近仕事の関係で中華人民共和国陝西省西安市を  
訪れる事が多い。陝西省と京都府及び西安市と京都市  
は友好提携を結んでいる。陝西省には万里の長城  
と並んで中国の二大世界文化遺産である秦始皇帝陵  
及び兵馬俑坑がある。兵馬俑坑には一つとして同じ  
顔のない実物大の兵士や馬などを象った俑が実に  
八千ほどもあり壮大なスケールと当時の強大な権力を  
窺わせる。また西安市もかつては古都長安として  
栄え、シンボルの古代城壁は中国の重要文化財である。  
訪問の都度これらについて丁寧な説明を受け、  
その遺跡の素晴らしさに感じ入っている。

それと対峙して思い出すわけではないが私の京都  
での学生生活は野球とアルバイトに明け暮れ、つい  
ぞ古都京都の深層に足を踏み入れることはなかつた。  
我が国では現在古都奈良・法隆寺など11の世界  
文化遺産があり古都京都もその一つである。清水寺、  
二条城をはじめ17の寺社や城が含まれており、大学  
時代に見聞を広める時間を作れなかったのかと残念  
に思う。

とはいえ4年間の野球部生活を通じて学んだもの  
が今も私の胸の中に生き続けている。現在私の机の  
右端には野球のボールが置いてある。しかも母校京  
大野球部のグラウンドで練習に使われた少し汚れた  
ボールだ。これを見ると泥にまみれての練習に耐え  
てきた事を思い出しどんな苦労も乗り越えていける  
気持ちが湧き出て心がりフレッシュされるような気  
がする。限られた予算と少ない部員数、且つ野球の  
経験が充分ではない面々の中で主将の大役を仰せつ

かった私は日々の練習や試合において効率と創意工  
夫に着目した。バックネット前に標的を作って捕手  
無しでピッチング練習をし、その捕手にあたる人材  
を守備やバッティングの練習にまわす。バッティン  
グピッチャーがマウンドの1メートル前からボール  
を投げ対戦相手の球威に負けない打撃力を養う。又、  
対戦相手が強豪ばかりなのでありとあらゆるデータ  
を収集し、これを様々な角度から解析して相手のチ  
ーム力を的確に把握し効果的な作戦を打ち立てる事  
にも努めた。更に試合に臨んでは、控えも含めた徹  
底した役割分担を通じて全員参加の勝利に向けて飽  
くなき挑戦の動機付けを行った。今にして思えばこ  
の時に考え、培ったものが企業という組織において  
非常に役立ってくれたようだ。

この他にも私は常々情報とは受身で知るインフォ  
メーションではなく、内容と意味を持ったインテリ  
ジェンス、それも能動的に得たものでなければなら  
ないと思っている。しかもスピードを重視し生きた  
アクションで戦略として活用できなければ意味が無  
い。

こうした野球部時代に加え社会人として経験を積  
み重ねる事で、ある信条を見出した。それは「人は  
信じて、仕事は疑え」だ。組織の仲間を信頼し絆を  
強め、明日の光明に向かって挑戦的意志を持ち続け、  
仕事の問題点を発見し解決へと導く。特に人間関係  
は重要であり大切に育むべきものだ。その一方で仕  
事に関しては絶えず旺盛な好奇心と疑問符を持ちな  
がら問題解決に結びつけていく方がより良い結果が  
得られると私は考える。

今、国立大学も法人化の流れの中で経営的に厳し  
さが求められている。大学教育の成果を評価し予算  
配分にもつなげる議論もある。一方でグローバル化  
の中で国際的に活躍しうる人材の育成も大学の大き  
な役割である。それだけに各大学の教育の充実と同  
時に学窓を後にする学生の実社会での活躍ぶりも大  
学の国際的な格、つまりは一種のブランド力が問わ  
れる。学内外一体となつてのブランド力向上が大切  
だと思う。

(おかべ けいいちろう コスモ石油株式会社代  
表取締役会長 昭和31年経済学部卒業)

## 随想

## 教養課程の思い出

名誉教授 荒木 徹



1957(昭和32)年京都大学入学の私達は、教養課程の1年目を宇治分校で、2年目を吉田分校で過ごした。陸軍火薬庫跡地の宇治分校には、暴発の際に上へ抜けるように作られた薄いトタン屋根・厚い壁の弾薬庫と高い土手が残り、蛙の鳴く池と小川と野草の間に、今思えば粗末な木造校舎が建っていた。敷地の奥、西の端にバラック的の学生食堂があり、きつねうどんが10円位であった。

英語の増野先生のテキストは、「チップス先生さようなら」でお馴染みのヒルトンの'Lost horizon'であり、有名なシャングリラが登場する事もあって、興味深く読めた。先生は、いかにも楽しそうに解説され、「〇〇月の狂気か、狂気の月か〇〇」と節をつけて言われたのを思い出す。「訳本があれば教えてほしい」と言われたが、誰も知らなかった。数年後に先生ご自身の訳本が出たので、早速、買って読んだ。

ドイツ語の高安先生の教科書は、ケストナーの'Der Kleine Grenzverkehr'(小さな国境往来者)で、一夏を南ドイツのライヘンハルに滞在して隣接するザルツブルグ(オーストリア)に通うゲオルグが、喫茶店でコンスタンツエとの恋に落ちる物語であった。アララギの歌人でもあられた先生は、これに出てくるザルツブルグの街頭劇'Jeder Mann'の様子を、これまた実に楽しそうに話された。30年後、ドイツの研究所に滞在した際に、この教科書を思い出し、近くのゲッチンゲンの書店で購入した。枕元に置いて、ドイツ語を思い出すのに眺めていたが、最近、「一杯の珈琲から」という題で、この物語の訳が出てくることを知り、通して読むことができた。

吉田分校の三高時代の古い木造校舎で、ル・フォールの'Die Frau des Pilatus'(ピラトの妻)を講じられたのは、平井先生だったと思う。エルサレムでキリストを処刑したローマの執政官ピラトの妻の苦

悩みの物語だったが、初学者には難しく、試験直前に知った訳本を参考にして勉強した。後日、同じ著者の他の作品も取めたこの訳本全編を読み、ル・フォールが、50歳近くになってから作品を書き始めて高い評価を得るようになったドイツカソリックの女流作家であることを知った。ガリレオの異端審判を書いた「天国の門」は、特に興味深かった。

西洋社会思想史や文化人類学も新鮮で面白く、この分野の書物に目を向けるきっかけになった。これらの講義は専門課程の勉強に直接役立つものではなく、原語の小説も授業では部分的にしか読めなかったのだが、文系学問から離れて理系に進む私には入門として貴重で、心の世界を豊かにしてくれた。自ら楽しむような先生方の授業は、学問の世界に憧憬を抱かせ、大学に残ることになった私の生き方にも影響を与えたと思っている。

大学前期2年間の在り様には色々な考え方があるが、受験勉強から解放されて専門課程に進む迄のこの期間は、人生で最も自由に勉学できる時であり、教養教育として充実させることを願う。専門知識の背後にある教養は、個人の知的世界を広げるだけでなく、この社会が抱えている困難の打開にも必須だと思ふからである。複雑な事象を単純に割り切って結論を出す粗雑な議論が多くなっている今こそ、多面的に深く考察できる力が必要なのであり、その基礎となる文理両系のバランスの取れた教養が重要になる。その意味で、教養課程の外国語教育も、会話とディベートの訓練は別にすると、教養教育の一つであって欲しい。

当時の京大入試では、理系志願者にも社会2科目が課されたが、今の2次試験はそうでない。そのせいか、理系の優秀な学生が、「歴史はよく知りません」と悪びれずに言ったりして、これで良いのかと危惧を抱かせる。このような知識の偏りの是正にも教養課程は役立つであろう。先ず自国の、それから世界の歴史や文化について、よく考えている人間が尊敬される国際人になれるのだと思う。

(あらき とおる 平成14年退官、元理学研究科教授、専門は地球電磁気学・太陽地球系物理学)

## 洛書

## 塞翁が馬

戸田 剛文

入学試験の季節になるといつも思うことがある。陳腐なことだけれども、人生って不思議だということだ。なぜこの時期なのかを理解していただくために、少し私の身の上話をさせていただきたい。



私は、一年浪人して京都大学に入った。特に何か目標があったわけではないが、現役のときは、法学部を受けて落ちた。浪人したときも、まあ、また法学部を受けようとなんとなく思っていた。浪人生のある日、模擬試験を受けに行き驚いた。なんだか、知らない学部が大学コード表にのっているのだ。去年までなかった学部、つまり、総合人間学部である。

入試の情報に疎かった私は、模試を受けるまで、まったくその新設の学部の存在を知らなかった。ミスブリかとも思ったし、そうじゃないとしても、なんとなくうさんくさいもののようにそのときは感じた。予備校の人にそういうのができるというのを聞いて、なんとなく受験してみたくなった。京都大学という伝統ある学校の新しい学部というそれだけで、なんだか魅力に思えた。周りの人には反対された。過去の受験データがないからだ。反対されたので、素直な私は余計に受けたくなくなった。そして、その春に総合人間学部の一期生となった。

入学後はなんとなく哲学を選んだ。卒業したら社会に出るつもりだった。でも、選びはしたが、勉強をしたわけではなかった。哲学書はとっつきにくく、すぐに嫌になった。周りの友人の知性あふれる会話は難しい単語でいっぱい、それが日本語だと気づくのにかなり時間がかかった。私は、あまり大学に行かなくなった。勤労と社会貢献に明けくれた。

しかし、とうとう怒られてしまった。卒業を考えるとっておかなければまずそうな基礎ゼミがあり、それを三回生のときにとっていたのだが、その授業の先生に、しょっちゅうさぼっていることを授業中に注意された。あまりにも恥ずかしく思ったの

で、その授業の単位は返上し(もらえそうになかったのだが)、その時間はもう自宅謹慎、あるいは社会貢献の時間にしようかとも思ったが、卒業することを考えれば、やむを得ず、残りの授業を出席する方を選んだ。

これで私の身の上話は終わりである。だからなんだ、こんな情けない話を載せられては、本学の恥だ、これまでの洛書を見よ、みなさんもっと学者らしいことを書いておられるではないか、とお叱りをうけそう。でも、今書いたことには、私にとってとても重要なことがあるのだ。ひとつめは、現役で受験に落ちたこと。ふたつめは、先生に怒られたことである。

浪人したから行くことになった総合人間学部は、なんと、今では私の勤務先になった。もし、現役のときに受かっていたら、おそらく今の仕事にはついていないだろう。現役のときに受かっていたらどうなっていたかということは、私にとってどうでもいいことだ。なぜなら、そんなことわからないし、今、私は自分が恵まれていると思っているからだ。そして、心を入れ替えて授業に出るようになって、逆に哲学が少しわかったような気になった。そうして、ようやくちょっと興味をもつようになった。しかも、そのときに私を叱った先生が、その後の私の指導教官であり、そして、その基礎ゼミで読んでいた哲学者についての研究書を、私は昨年出版してしまった。

現役のときに入試に落ちて本当によかったとか、あのとき怒られて本当によかったと、この時期になると思うのだ。人生にはいろいろなことがあるが、それがいいのか悪いのかということは、そのときだけで決まるわけではないということなのだろう。失敗しても、将来その失敗がむしろ幸運への導きだったと思えるようにやればよいということだ。まあ、逆に言えば、今後大きなヘマをやれば、やっぱりあれがつまずきの石だったか、ということになるのだろう。そんな当たり前のことを、私はいつもこの時期になると思うのだ。

(とだ たけふみ 人間・環境学研究科准教授、専門は哲学)

## 話題

## 生存圏研究所がマレーシアで第83回生存圏セミナーを開催

平成19年12月12日(水)～14日(金)の3日間にわたり、生存圏研究所は協定校であるマレーシア理科大学生物学部との共催で、同大学(マレーシア・ペナン)において、第83回セミナーを開催した。

同大学生物学部と生存圏研究所(旧木質科学研究所)は、平成13年7月に協定を締結し、主として都市昆虫学の分野で研究交流を進めてきた。平成18年7月に協定の更新を行い、より広い分野での研究交流を実施することに合意した。

このような背景から、本セミナーの発表内容は木質科学に関する基礎研究から先端研究までの最新の研究テーマを網羅するものとなった。70人を越える参加者があり、熱心な聴講と活発な質疑応答が実施され大変盛況であった。

また今回、生存圏研究所から若手研究者を数人参加させ、海外での発表などを経験させることにより、国際的見地からの研究者としての資質向上を同時に達成できる内容とした。

両機関は着実に交流実績を積み重ね、今回のようなセミナーを継続的に開催している。

マレーシア理科大学はマレーシア政府によって現在理系の研究大学としてトップにランクされている。

ホームページは <http://www.usm.my/en/>



セミナー風景

(生存圏研究所)

## 第11回リカレント教育講座「『心の教育』を考える—発達障害と家族への支援—」を開催

教育学研究科附属臨床教育実践研究センターでは、年1回、教育相談活動に携わる専門家(幼・小・中・高校教諭、養護教諭、心理臨床専門家)を対象に、研修活動の一環として、リカレント教育講座(臨床教育実践研究センター主催、大学院教育改革支援プログラム「臨床の知を創出する質的に高度な人材養成」共催)を開催している。不登校、非行、ひきこもりなど、現在の教育現場で大きな問題となっている現象を通じて、子どもの心や教育について深く考えることをねらいとしており、毎年、全国から熱心な教師や臨床心理士等専門家の参加を得ている。

第11回となる今年度は、「発達障害と家族への支援」を全体テーマとして、2月15日(金)、16日(土)の2日間の日程で84人の参加を得て開催した。第1日目には分科会に分かれて事例研究を行い、第2日目には第一線で活躍している精神科医や心理臨床家を迎えてのシンポジウムを行った。

参加者からは、学校現場を始め、さまざまな臨床現場で大きなテーマとなっている「発達障害」と診断される子どもや、家族や周りの大人たちにどのよう

な支援が考えられるかについて活発に意見が交わされた。またこちらが子どもたちの「問題行動」をどのように捉えていく必要があるかについて、多くの刺激を得ることができたとの感想が寄せられ、大変好評であった。来年度以降も引き続き開催していく予定である。



第2日目のシンポジウムの様子

(大学院教育学研究科)

## マラヤ大学工学部長が工学研究科を訪問

1月30日(水)に、マラヤ大学(マレーシア)の Ghazaly Shaaban 工学部長が桂キャンパスの工学研究科を訪問された。西本清一研究科長と津野洋教授、松岡譲教授、藤井滋穂教授を交えた懇談では、西本研究科長より、『アジア人財資金構想』高度専門留学生育成事業「産学協働型グローバル工学人材育成プログラム」が紹介され、その後、清華大学(中国)を加えた三大学による共同同時講義(e-learning)の継続を含めた教育・研究協力について、意見交換を行った。

工学研究科では、主に JSPS 拠点大学交流事業(JSPS-VCC)を通じてマラヤ大学との学術協力を深めてきたが、今後は、教育面においても協力関係を



左から、松岡教授、Shaaban マラヤ大学工学部長、西本工学研究科長、津野教授、藤井教授

強化していく予定である。

(大学院工学研究科)

## きさらぎコンサートを開催

医学部附属病院では、2月22日(金)、「きさらぎコンサート」を開催した。このコンサートは、入院中の患者さんや外来を受診した患者さんに少しでも楽しんでもらおうと、ボランティアの出演者を招いて平成7年から毎年開催されている。

猪野元子さんによるバッハの「シンフォニア」やメシヤンの「風の中の反映」などの華麗なピアノ演奏の後に披露された「たつきゅうさん」のジャグリングでは、子どもから大人まで楽しめる構成になっており、会場が一体となった楽しい雰囲気に包まれた。

次いで、医学研究科の准教授 小柴貴明さんのフルート、小柴恵子さんのヴァイオリン、上田聡子さんのピアノで、メンケンの「美女と野獣」、サン・サーズの「白鳥」などが演奏され、美しい音色で観客を魅了した。



たつきゅうさんのジャグリング

外来棟アトリウムホ

ールに設置されたコンサート会場には250人以上の患者さんらが集まり、こころ癒されるひとときとなった。



上田さん(左)、小柴恵子さん(中央)、小柴貴明さん(右)による演奏



猪野さんのピアノ演奏

(医学部附属病院)

## 訃報

このたび、池上<sup>いけのうえ じゅんいち</sup> 淳一名誉教授、佐藤<sup>さとう ひさし</sup> 長 名誉教授が逝去されました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

以下に両名誉教授の略歴、業績等を紹介します。

## 池上 淳一 名誉教授



池上淳一先生は、平成19年12月23日逝去された。享年87。

先生は、昭和18年京都帝国大学工学部電気工学科を卒業され、同23年に同大学院(工学部)第2期を修了後、ただちに京都大学助教授として工学部電気工学科に勤務された。

その後昭和29年に新設の電子工学科に移られ、同33年2月に同教授に就任、高周波工学講座を担当された。昭和59年4月停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。退官後は、昭和59年から平成11年まで福山大学工学部で教授を務められ、その間、同大学工学部長、学長補佐、工学研究科長などを歴任された。

先生は主として高周波電子回路、マイクロ波・ミリ波および光回路などに関して先駆的な研究を先導された。高周波応用測定、原子周波数標準、マイクロ波デバイスおよび回路、レーザ同期と共振器、磁気波回路、光集積回路など、現代のエレクトロニクスと高周波技術を支える数多くの領域で独創的な業績を挙げられ、多くの優れた人材を輩出された。また先生は京都大学在職中に、郵政省電波研究所客員研究官、日本電信電話公社研究開発本部顧問などを務められ、さらに、電子通信学会副会長、レーザ学会理事、放射科学研究会理事長などを歴任された。これら一連の教育研究活動、学会活動により、平成8年11月3日勲三等旭日中綬章を受けられた。

(大学院工学研究科)

## 佐藤 長 名誉教授



佐藤 長先生は、1月6日逝去された。享年93。

先生は、昭和14年に京都帝国大学文学部史学科を卒業後、文学部副手となり、あわせて同15年より同大学院(東洋史学)に在籍し、東洋史学の研鑽を積まれた。昭和17年よりチベット文化研究とチベット語の修得のため中華民国に留学し、同21年に帰国後、神戸大学助教授などを経て、同29年7月に京都大学文学部助教授に配置換、同41年6月に教授に昇任され、東洋史学第一講座を担当された。昭和46年より京都大学評議員に併任され、同48年から1年間文学部長として大学行政に尽力された。昭和53年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。退官後は昭和60年まで佛教大学文学部教授を務められた。

先生は東洋史研究室において数多くの研究者を育てられただけでなく、東洋史研究会副会長、史学研究会理事長、東方学会常務理事を歴任し、東洋史学なかでもチベット史学の発展向上に大きく貢献されたほか、京都大学文学部附属羽田記念館の主事あるいは運営委員として、創立以来その運営に尽力された。

先生はチベット史を主な研究領域とし、漢文文献、チベット語文献などを縦横に駆使して精緻な考証を重ね、その通史を明らかにすることを目指された。『古代チベット史研究』(上)(下)、『中世チベット史研究』など日本のチベット史研究の水準を飛躍的に高めた著書を相次いで公刊されたほか、さらに漢代から清代にわたる中国・チベット文献に現れた地名、族名を考証し、『チベット歴史地理研究』を著された。この研究に対して、昭和54年度日本学士院賞が授与された。また平成9年には、大同生命地域研究賞が授与された。このほかチベット年代記『フラン・テプテル』の翻訳、『五体清文鑑訳解』の編纂なども、学界に大きく貢献した業績である。

先生はチベット史を主な研究領域とし、漢文文献、チベット語文献などを縦横に駆使して精緻な考証を重ね、その通史を明らかにすることを目指された。『古代チベット史研究』(上)(下)、『中世チベット史研究』など日本のチベット史研究の水準を飛躍的に高めた著書を相次いで公刊されたほか、さらに漢代から清代にわたる中国・チベット文献に現れた地名、族名を考証し、『チベット歴史地理研究』を著された。この研究に対して、昭和54年度日本学士院賞が授与された。また平成9年には、大同生命地域研究賞が授与された。このほかチベット年代記『フラン・テプテル』の翻訳、『五体清文鑑訳解』の編纂なども、学界に大きく貢献した業績である。

(大学院文学研究科)

## 公開講座

## 情報学研究科公開講座「知っていますか？ IT の秘密」

1. 日 時：3月29日(土)13:00~16:30(12:00開場)
2. 場 所：時計台記念館 百周年記念ホール
3. プログラム：
  - ・携帯はなぜつながるのか 情報学研究科 教授 守倉 正博
  - ・ウェブ検索はどうしてあんなに便利なのか 情報学研究科 教授 黒橋 禎夫
  - ・なぜコンピュータが将棋名人に迫れるのか 北陸先端科学技術大学院大学 教授 飯田 弘之
 ミニオープンキャンパス実施(会場周辺で大学院生・若手教員の話が聞けます)  
 オーガナイザ：岩間一雄(情報学研究科)
4. 対 象：中学上級・高校生以上一般
5. 参 加 費：無料
6. 参加申し込み：不要(先着順500名)
7. 問い合わせ先：京都大学大学院情報学研究科 澤村玲圭  
 TEL：075-753-5947  
 E-mail：sawamura@lab2.kuis.kyoto-u.ac.jp  
 詳細は、情報学研究科ホームページをご覧ください。  
<http://www.i.kyoto-u.ac.jp/koukaikouza/2008/index.html>

## お知らせ

## 人文研アカデミー アンтониオ・ネグリ講演「知識労働とプレカリアート」

人文科学研究所では、アンтониオ・ネグリ氏の来日に際して、時計台百周年記念ホールで講演会を開催いたします。マイケル・ハートとの共著『<帝国>』や『マルチチュード』において、グローバル化する世界情勢のただなかに新たな社会運動の主体の生成を見きわめ、現在世界的にもっとも注目されるこの哲学者の関西圏で唯一の講演会に、多くの方々の御来場をお待ちしております。

1. 日 時：3月25日(火) 18:00~20:30(開場17:30)
2. 場 所：時計台記念館 百周年記念ホール
3. 演題と講師：『知識労働とプレカリアート』 アンтониオ・ネグリ  
 (講演イタリア語・日本語逐次通訳あり)  
 コメンテーター：神戸大学国際文化学研究所教授 市田 良彦  
 司 会： 京都大学人文科学研究所准教授 王寺 賢太
4. 定 員：500名(聴講無料・事前申し込み不要)
5. 問い合わせ先：京都大学人文科学研究所 総務掛 TEL:075-753-6902  
 E-mail：z-academy の後に @zinbun.kyoto-u.ac.jp をつけてください。  
 詳細は、人文科学研究所ホームページをご覧ください。  
<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/>

**隔地施設  
紹介**



雄阿寒岳 (1371m) と森林の垂直分布



釧路湿原



標茶のカラマツ人工林

**フィールド科学教育研究センター北海道研究林 (<http://www9.ocn.ne.jp/~sibe/>)**

北海道研究林は北海道東部に位置し、釧路市の北北東45kmの標茶区と西40kmの白糠区からなる。ともに旧陸軍省軍馬補充部用地跡に1949年と1950年に設置された。

標茶区は根釧原野のほぼ中央、釧路湿原の北東端の緩やかな丘陵地に位置し、標高30~149m、面積は1,447haである。年平均気温は5.7℃、年降水量は1,157mm、積雪は30cm程度で、表日本型の内陸性気候を示す。夏季は最高気温が30℃に達することもあるが、冬季は晴天の日が多く乾燥した北西季節風のために最低気温が-30℃近くまで低下する。北海道の中でも気象条件が厳しい地域である。白糠区は阿寒山群の南端に位置し、標高64~270m、面積は880haである。年平均気温は7.3℃、年降水量は1,318mm、積雪は60cm程度で、夏季は太平洋の海岸線に近いために海霧によって日照不足になり易く、冬季の最低気温が-25℃以下になることは稀である。



天然林の植生はミズナラ、ハルニレ、ヤチダモをはじめとする落葉広葉樹にトドマツなどの針葉樹が混じる温帯から亜寒帯への移行帯にあたり、標茶区では針葉樹を欠く。両区で100種に近い樹木種が確認され、河川沿いの湿地林の林床にはヤチボウズも見られる。標茶区では人工林420haのうち200haにカラマツが植栽され、白糠区では人工林125haのうちトドマツ林が80haを占める。研究林にはエゾシカ、キタキツネ、エゾユキウサギ、エゾヤチネズミ、クマタカ、クマゲラ、ヤマゲラなども生息しており、エゾシカによる森林被害も深刻である。白糠区ではヒグマの痕跡もみられ、入林には充分注意が必要である。

研究林は、釧路湿原、阿寒、知床の3つの国立公園と至近距離にあり、その地理的特性を活かして全学共通および農学部の実習が年4回行われている。「森-里-海連環学実習C」は北海道大学と共同で行っているもので、自然度が高い別寒辺牛川の最上流部に近い標茶区から、牧草地として使われている中流、



エゾシカ



ヤチボウズ



シラカンバ



ホザキシモツケ



標茶管理棟



白糠管理棟



木工体験教室



森一里一海連環学実習C



北海道東部の人と自然・研究林実習III



北海道東部の厳冬の自然環境・研究林実習IV

そして下流の厚岸湖にいたる流域の植生、土壌、水質・水生生物調査を通じて、森一里一海の繋がりを学ぶ。夏の「北海道東部の人と自然・研究林実習III」は、北方の森林・湿原植生、森林の垂直分布や火山性土壌、道東の林業・林産業の現況を学ぶとともに森林作業を体験する。冬の「北海道東部の厳冬の自然環境・研究林実習IV」は、季節凍土が発達する道東において、冬の森林、積雪・凍土の調査法を修得し、環境資源としての森林の役割や持続的な管理について学ぶ。「調査研究方法論実習I」は研究林を拠点に、国有林・知床自然センターの協力の下に、世界自然遺産の知床半島や阿寒・釧路湿原国立公園の森林・林業を調査し、人と自然の新しい関係を探ることを目的としている。これら実習はセンター発足後の2003年度以降に始まったものも多く、近年、実習等で利用する人数は増加傾向にある。また、木工体験教室など、地元の小中学生を中心とする利用も増加しており、教育・宿泊施設の充実をはかることが目下の重要課題である。

研究面では、長年にわたり天然林の動態や人工林の成長に関する調査、気象観測、酸性降下物のモニタリング調査、樹木フェノロジー観察が行われてきた。2003年からは樹木の生活史、物質循環に関するプロジェクト研究も始まった。

標茶区は北緯：43° 19′ 東経：144° 37′，大学研究林としては日本の最東に位置する。4月の雪解けとともにフクジュソウが咲き始めるが、凍土が融解して林内に車で入れるのは5月連休明けである。サクラの開花は5月後半、木々が充分に開葉するのは6月後半となる。初夏の夜明けは早く、11月後半には午後3時を過ぎると夕焼けとなり、京都とは1時間ほど異なる。山や湿原では短い夏に高山植物が咲き乱れ、9月後半には紅葉・落葉が始まる。10月半ばには最低気温がマイナスを記録し、山道ではスノータイヤが必要である。道東では酪農や大農経営で生計を立てているために、街に集中することなく、家族単位で隣近所と離れて生活している家庭も多い。車は高速で疾走し、自転車に乗った子供達を見ることが少ない。本州とは異なる自然環境と生活形態をもつ道東に、是非訪れて頂きたいと思っている。

〒088-2339

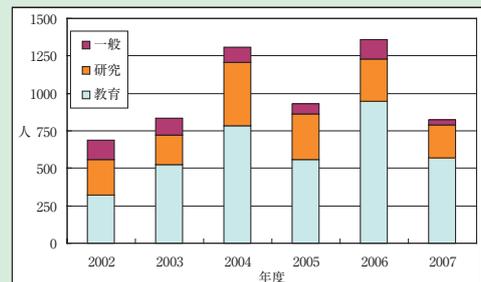
北海道川上郡標茶町多和

電話：015-485-2637 FAX：015-485-4016

E-mail：hokuenji@kais.kyoto-u.ac.jp

### 職員構成

教員 1人, 事務職員 2人, 技術職員 6人, 時間雇用職員 1人



研究林利用者の推移 \*2007年度は2月末までの集計

### アクセス

- ・航空機：関西、伊丹、中部国際、羽田空港から釧路、女満別空港まで1.5~2.5時間。釧路空港からJR釧路駅、女満別空港からJR網走駅へは連絡バスでそれぞれ45, 25分。
- ・フェリー：舞鶴、敦賀港から小樽、苫小牧東港まで19~20時間。JR小樽駅、JR苫小牧駅からJR札幌駅まで約1時間。JR札幌駅からJR釧路駅まではJR特急あるいはバスで4~6.5時間。

### 標茶研究管理棟

- ・JR釧路駅—JR標茶駅 1時間
- ・JR網走駅—JR標茶駅 2時間10分
- ・JR標茶駅—標茶管理棟(3.3km)徒歩50分

### 白糠研究管理棟

- ・JR釧路駅—JR白糠駅 約40分
- ・バスで約1時間
- ・JR白糠駅—白糠管理棟(2.0km)徒歩30分